

東アジアの交流と文化遺産



『渤海王国と古代日本』

『東アジアの交流と歴史文化』

□**渤海の故地を巡る**：平成 16 年（2004）年秋、関西空港から大連経由でハルビンへ旅する機会があった。紅軍街にある黒龍江省博物館に展示する渤海時代の文物の観覧を目的としていた。単独行であったが上京城址（寧安市）で発見された王国（698—926）の光り輝く金銅仏・緑釉瓦当・精緻な篆刻による天門軍印・三彩獣頭・銅鏡・銅人など渤海文物を実見し日本の平城宮址出土品との類似性に感嘆した。その後、帰国までの 2 日間を旅行社の専用車で通訳と共に牡丹江を経て寧安市渤海鎮へ入った。途中の自然景観といえば田野は広がり緩やかな山並みが印象的で想像していた急峻な山系は眼前に展開しなかった。牡丹江沿いの上京龍泉府址・上京遺址博物館・興隆寺（渤海時代の大石灯塔）を足早に巡回し鏡泊湖畔の賓館に宿を取った。私は夕闇の迫る鏡泊湖面を眺めながら 926 年（日本の延長 4 年）正月に隣国の契丹が攻め入り忽汗城（渤海上京城）が陥落し第 15 代王大諲譔（たいいんせん）は捕虜となり、翌月に国名は「東丹国」、城は「天福城」に改称され 228 年の歴史に幕が下りた「海東盛国」＝「記録の消えた王国」と古代日本の交流の考察に着手するための淡い構想を描いていた。

□**多様な東アジア交流学**：西安市の陝西歴史博物館を初めて訪れたのは日中平和友好条約（1978 年）が締結された翌年夏であった。1970 年に西安市発見の和同開珎銀錢 5 枚のうち 1 枚を当館で、2 枚目を旅の終りに北京の中国歴史博物館で実見したのが画期となり 10 年後に中公新書『和同開珎』の刊行をみた。今思えば金沢時代に編集担当した『日本海地域史研究』1—14 輯（文献出版、1978—1998 年）と共に東アジア交流学への出発点となった。まもなく開始した金沢星稜大学の文科省採択プロジェクト「北東アジアと北陸地域の経済・文化交流に関する学術情報の集積と学際的研究」（2005—2009 年）への取り組みは内外 30 余名の参画する活動となり、以後の科研費活動と交流研究の展開に大きな支えとなった。

□**活動の記録へ**：本書は活動成果を記録し記憶と模索の「拠り所」となることを意図しており、城西国際大学で遂行した科研費「古代日本と渤海中期王権の交流と流域遺産に関する歴史環境学的研究」（2015—2019）の成果の一部である。活動の推進には、学校法人城西大学（法人本部）と城西国際大学（教務課）の全面的協力を受け研究活動面で王禹浪教授（大連大学、現在、黒河学院）の協力を得た。また多年にわたり日本学術振興会から科学研究費による継続研究を支援されたことも忘れがたい。あらためて関係機関とお世話になった方々に厚く感謝申し上げたい。

（報告書Ⅱ「はじめに」から抜粋）

2019（平成 31）年 季春

城西国際大学国際人文学部 客員教授
大連大学・黒河学院 客員教授 藤井 一二